

瀬戸のかじこ

来栖良夫

光男はなぜかじこになったか

瀬戸内海の忍島は、ぐるりがわずか4キロという小島でした。ここは山口県にはいますが、それより四国の愛媛県や広島県にちかく、いつも、ひっそりとしずまりかえていました。

1944年（昭和19年）の12月に、アメリカ空軍の東京大空襲がありました。また、地震やつなみがおこって、1000人あまりの人が死にました。そのころです。目を大きくあけた、やせた子どもと足にゲートルをまき、地下たびをはいて戦闘帽をかぶった男が、忍島の船つき場におりてきました。

島の道は、石段のようなのぼり坂ばかりでした。りょうがわには、石をつみかさねてかこいをした漁師の家がありました。屋ひなかの忍島は、はたらけないとしよりと、はだかの子どもばかりでしたから、ものおとひとつたてていません。

「あれ、なんじゃとよ。」

「ふん、またかじこがきおったんよ。」

石垣のおくから、おばあさんと子どものこえがきこえてきました。

石原光男は13になっていました。おとうさんとふたりでくらしていましたが、おとうさんは徴用にとられて兵器工場へはいました。ひとりぼっちの光男は学校へいく気にもなれませんでした。ある日、光男は下関から汽車にのりました。汽車のついたところは大阪でした。空襲警報が出ていて、まっくらい夜でした。すると、どこへいくあてもない家出少年のそばへ、

「おい、あんちゃん。おなかすいてんのやろ。」

といいながら、よりそってきた男があります。

「さあ、たべな。ギンめしのおにぎりや。」

男は、白米のにぎりめしをくれました。

「家出をしてきたんか。わかっるとる、わかっるとる。そやけどな、そないうろうろしとって、おまわりにつかまって、感化院というところへぶちこまれてみい。一生そこを出られんようになるで。それよか、わしがええとこせわしてやるよって、そこではたらかんかい。さかなも、いもも、くいほうだいや。」

どこへいっても、ろくろくたべるものもない戦争のまっさいちゅうでした。いもや、さかなが腹いっぱいたべられるときいて、ほんとうにうれしくなりました。男といっしょに、汽車にのり、バスにのり、船にのって、忍島へついた光男は、ここの漁師の家にやとわれました。

ひっそりとした忍島も、夜のあけがたはさわがしくなりました。58戸の漁師の家では、きょうそうで小舟を出すのでした。

忍島の沖あいには、瀬戸内海でももっとも小島のおおいところですよ。人のすめない、みどりの島が、青いぬのをしたような海の上にかさなりあつてうかぶさまは、まるで絵のようでした。しかし、舟をこぎだしてみると、小島のあいだをながれる潮のうずまきは、きみのわるいほどでした。漁師たちは、そのながれにのって、ふかい海のそこへつり糸をたれ、タイをつりました。忍島の舟、山口、広島、愛媛などからきた舟が、いりみだれていました。どの舟も、のりこんでいる漁師はたったひとりでした。そうして、1日じゅう、つり糸をあげたり、さげたりしながらは

たらいています。むかしながらの「1本づり」というやりかたでした。

舟はひっきりなしに、潮にながされます。また、潮のながれのかわるたびに、舟のぼしよをかえなければ、タイはつれません。そこでどの舟にも、やすみなしにろをこぎつづける、かじこ（梶子・舵子）をのせていました。

その日の漁のでき、ふできは、かじこのはたらきひとつできまる、といわれるほどでした。そのかわり、かじこは1日じゅう、うでをやすめることができません。親方（やといぬし）の顔色ひとつで、すばやく、ありったけのちからでろをおし、タイのあつまるところへ、舟をもっていかなければなりません。

かじこは、12、3から、17、8ぐらいまでのしょうねんばかりでした。石原光男のようにはじめてろをにぎるものは、ゆだんをすればたちまち親方の青竹になぐりつけられました。

「1人まえのかじこになるにや、6年はかかる。たたかれるほど、しごとをはやくおぼえるぞな。」
親方はつり糸をにらんでつぶやきます。

朝のくらいうちから海へ出て、ろをおしつづけ、つり糸がみえなくなってから浜へもどれば、舟あらいをし、家へかえっても、親方やおかみさんのよこれもの、あかんぼうのおむつのせんたくと、しごとはきりもなくつづきました。それから犬のように土間でごはんをたべ、土間のすみへよこになるのでした。この島では、イワシがお米のかわりでした。舟でたべるひるめしは、黒い麦のおにぎりふたつでした。

ある夜、光男は親方にたのみました。

「おれには、このしごとはつとまりません。どうか下関へかえしてください。」

親方は、だまってキセルをはたいていました。おかみさんがはきだすようにいいました。

「こじきやろう！ かえりたけりや、はだかでかえれ。もう、めしはくわせん。」

イワシのごはんはとりあげられてしまいました。むつつりとタバコをすっていた親方が、いきなり土間へおりてきて、キセルで光男の顔をなぐりました。

「かえらん、かえらん！ かんにんしてください！」

光男は頭をかかえてなきだしました。

「ようし、そんならめしをくえ！」

「親方、おれ、イワシばかりくってるので、おなかがいたくて、がまんできんのじゃ。」

「船へのって、ろをおしてりや、はらいたなぞけろりとなおるぞな。」

親方は、あくびをしながら、ねどこへもぐりこみました。

正美はなぜかじこになったのか

忍島はまずしい土地です。

島の58戸の家には、電燈も、新聞も、ラジオも、時計もありませんでした。母島から医者がかかるのは、だれかが死んだときだけでした。小学校と、生徒が8人だけの中学の分校がありましたが、そこはかじこよりつくところではありませんでした。

ちかくの島にすこしばかりの畑もありました。タイの季節がおわると、イワシとりもしました。しかし、なんといっても忍島の人たちの生きる道はタイの1本づりです。そのためにはどうしてもかじこがいりようでした。そうはいっても、だれがこんなしごとをよろこぶでしょう。わかいものは島を出て、もつとはたらきがいのあるしごとをえらびます。まともに人をやとうちからの

ない1本づりの漁師たちは、よそのまずしい土地から子どもをいれて、かじこにするようになりました。こういうならわしのはじまるのは、江戸時代のすえのころからだといわれています。

石原光男のようにだまされてきたものもいました。戦闘帽の男と親方が、どんなとりきめをしたのか、光男は知りません。1年たちましたが、親方は1銭の給料もはらおうとはしませんでした。

光男がきたころ、忍島には30人ほどのかじこがいました。あらましは、愛媛県のまずしい村から売られてきた子どもたちでした。ところが、太平洋戦争がおわると、島のかじこは、60人にふえました。

戦争で家をやかれ、親兄弟とわかれわかれになったもの、家族が死んでしまったものなど、ねるところもなく、たべさしてももらえない戦災孤児や、浮浪児がふえたためでした。周旋屋はそれに目をつけました。

「腹いっぱいたべさせてやるで。」

と子どもたちをだまし島へつれこみました。感化院や孤児院からも子どもをもらいさげてきました。

「周旋屋に手数料をとられるのはばかくさい。」

と自分でさがしにでかける親方もありました。そして、

「ええ、こいつを、わしが家へつれていきまして、真人間にしてやろうとおもいますが、いかなものでありましようか。」

とわざわざ警察へことわったりしました。感化院や警察では、

「浮浪児はふえるわ、予算はないわで、よわつりました。こりゃ、大たすかりですわ。」

とでもいったのでしょうか。とにかく、かじこはどんどんふえていきました。

瀬戸内海の夕ぐれはうつくしく、空も海もまっかにぞまりました。まるでおとぎばなしの国へきたようでした。しかし、島にあがれば、くもの巣へかかった虫とおなじでした。人のちからでは、沖のうず潮をおよぎきつてにげることむりでした。しごとがおわれれば、親方が、船にがちゃんど錠をおろしてしまうのです。

島の人のなかには、つらいかじこの年期をつとめあげて、1本づりの漁師になったものもいました。そんな親方をもったかじこは、せめてものしあわせというほかありません。ごはんもぎしきでたべられました。しかし、そんな人でさえ、かじこどうしが、したくするときげんをわらくするのでした。そこで、石原光男などは、家の人がねむってしまうのをみてから、さっとぬけだして、友だちとあうことにしていました。それもひと月に1どか2どのはなしでした。

石原光男と村田正美と伊藤三郎が、しめしあわせて、みじかい夜をかたりあかすところは、分教場のちかくの岩のかけでした。波が足もとまでやってきました。

村田正美は愛媛県からきた、ことし11のおとなしい子でした。おなじとしごろの島の子どもが、

「おい、おまえ、どうしてかじこになったん？」

といったとき、正美はこんなふうにかえしました。

「親がようやしなわんけ。子どもがようけおって、うちら、めしよくくわせてもらえんけ。」

いつかもこの岩かけへ3人があつまって、

「おれは船のりになりたい。大きな船のよ。」

「おれは鉄道員になりたいや。」

としゃべりあったとき、正美は、

「うらあ（おれは）かじこでええ。」

といました。光男と三郎はおどろきました。すると正美は、

「うらあ耳がとおいけん。それに年期がのこつとるし、ほかへはいけんもの。」

と行ってうつむきました。

愛媛県の、村田正美の浜べの家へ、周旋屋がきたときでした。正美は、

「とうちゃん、うらあなんでもするけん、かじこにはなりとうない。」

といました。おかあさんも、

「のう、かじこのはなしはまたにしてつかあせ。これがいやだというだでのう。」

とことわりました。周旋屋は、まずしい親の心をちゃんとみぬいていましたから、その日はそのままひきあげ、あくる日、またやってきました。

「5年の年期で2500円というのは、わるくないがのう。きよ年わしがせわしたときや、5年で2000円じゃった。かじこ、かじこというけれど、しんぼうしてつとめりや、船をもらって一本だちもできるやないかい。」

「それもそうじゃのう。うちの子は耳がわるいけん、いっそ、かじこのほうがええかもしれん。」

「まったくよう。なに、むすこをくれてやるわけやなし、病気をすりや、むこうがめんどうをみる。あとでかねがிரりようになりや、年期をのばしゃええ。子どもが親のくらしをたすけるのはあたりまえ。むすこじゃって、ここにおつておなかつかしておるより、なんぼええかしれん。家のもんは口べらしになるしのう。日本は戦争にまけたよつて、もうろくなことになりやせんわ。こんなときに、2500円がころがりこもうというのやないかい。」

「島へいきや、おまえも満腹、家のものも満腹。」

とおかあさんが子どもの顔を見ました。

正美はこっくりしました。

「そんなら、うらあ島へいくけん。」

三郎はなぜかじこになったか

村田正美は、忍島のかじこになりましたが、すこしも満腹はしませんでした。

「おまえ、腹がひもじいかい。」

と石原光男がたずねました。

「いつもひもじい。」

「親方がな、つったイワシのほねをさつとごいて、海へつけて、なまのままたべおつた。おめえもくつてみい、つて親方がいうから、おれもくつた、あまかつたよ。」

「親方がええいわにや、1びきもくわれん。きようは、うちらイワシを2俵もとつたのに、くわしてくれなんだ。」

「正美よ、そんなときは、かつばらいでもなんでもせいや。」

ねそべっていた伊藤三郎がいました。

三郎は、3人のなかでは1ばんとし上の16歳でした。顔のはんぶんにはケロイドがありました。ピカドンにやられたのだと三郎はいいました。

広島をやけだされ、みなしごになった三郎は、かつばらい、モクひろい、こじき、なんでもし

て生きてきました。そうして、おまわりさんにつかまって、感化院にいれられ、それから忍島へもらわれてきたのでした。

「感化院はよかったなあ。グリコでもチューインガムでも、なんでもかっぱらいができたが、この島にはぬすむものもないや。」

三郎は、ふところから、だいじにしているハーモニカをだしました。ふるぼけた、ちいさいハーモニカでした。島へくる日、感化院の小使いさんが、

「うちの死んだ子がふいとったもんじゃけん、おめえにやるわな。島へいったらふいてあそべ。そうして、ようはたらいて、りっぱな漁師になるんじゃぞ。」

といいながら、ポケットへおしこんでくれたものでした。

三郎たち浮浪児なかまが、この島へきたとき、親方やおかみさんらは、
「こんどはふつうの子じゃないけん。ぬすつとを家にかつとるようなもんじゃのう。」
と大きなこえでいいました。島の人たちは、かじこを人間のなかまとおもいませんでした。それで、当人の目のまえで、なんでもあけすけにしゃべるのでした。

「あいつら、うちのもんへ手を出すかう？」

「おお、だす、だす。みたもんをとるんじゃ。気をつけいよ。」

「感化院ちゅうたら、子どもの刑務所じゃけ。あいつら、くさいめしばかりくうとったのかや？」

「きまつとるわな。ようけくやろ。腹いっぱいくわせるとくせになるけ、くわせんぼうがええぞ。」

「あっはっはっ、それでもただじゃけ、まあ、やすくついたぞな。」

11から19歳までの、60人のかじこは、朝はくらしいちにおきてかまどをたきつけ、すこしでも人よりさきに船をだそうとはたらきました。1日じゅうろをおしつづけ、いつもおどおどして、親方やおかみさんの顔色ばかりみていました。村からきた子どものほかは、かえるところもないせいか、そんなかじこはひどくおとなしく、そうしてうすぼんやりしていました。とにかく、かじこたちのいちばんつらいことといえば、まい日のたべものがすくないことでした。親方は、気にいらないと、すぐ、

「めしをくうな。」

と、たべものをとりあげる罰をくらわせました。これがこたえました。

1948年（昭和23年）の春、石原光男は夜中に目をさましました。ふえをふくようなほそいおとがきこえてきました。雨戸のすきまから月のひかりがもれていました。耳をすましていると、それはふえのおとではなくて、まちがいない人のこえでした。

「出してくださいよう！もうたべません。だしてください！親方、おかみさん！」

光男はいっぺんにさむけだち、雨戸へからだをすりよせて、となりの家のかじこの声をききとろうとしました。光男はかぞえどし17になっていました。いまでは1人まえのかじこでした。なぐられなくても、タイやイワシのむれをおって舟をあやつるようになりました。けれども、腹八分めにたべさせてもらい、土間でねむるだけの少年労働者であることには、すこしもかわりがありませんでした。

となりの家のかじこ佐々木民治は、感化院からきた13の少年です。かわいらしい子どものくせに、ぬすみが大すきでした。民治は、ぬすんだものを友だちにわけてやることも大すきでした。かじこになってからは、よくぬすみぐいをして親方になぐられました。ここ4、5日というものの、石段の道や浜へすがたをみせていませんでした。光男は、親方とおかみさんが、こんなはな

しをするのを耳にしました。

「となりのぬすつとは、腹がひもじいというて、夜中にぼろをかみながらすわつとったりするとよ。」

「このせつのかじこは、いくじがないのう。」

「それで、なにをくったんかしらんが、えらくくだしてのう。それでも土間のなかをはいまわつてさがすで、手がつけれんらしい。」

「ふうん、いくらかじこでも、いっぺんぐらい医者にみせとかんと、死んだらこまるで。せわのやけるぬすつとじゃい。」

なぜかじこのことが知れわたったか

佐々木民治はダンベーにおしこめられてしまいました。ダンベーは、タイのえさにするクロイカを、生かしたままいれておく箱です。

これで、ぬすみぐいはできなくなりましたが、箱のなかで大小便をするので、家のなかがかくさくてやりきれません。親方は、民治をいれたダンベーを、庭さきの小便つぼの上へはこび、

「ここなら、いくらたれながしてもええわ。腹くだりのなおるまで、そうしておれや。」
といいました。

ふえのようなこえは、となりの家の庭さきからきこえていたのです。石原光男はその夜はねむれませんでした。あくる日の夜も、雨戸へ耳をおしつけていました。民治は、もう、出してください、とはいわなくなりました。

「なにかください。なにかください。」

そういうだけでした。

光男はおもてへぬけだし、どろぼうのように、となり家とのさかいの石垣をのりこえました。まっ黒いダンベーが月の下でひかっていた。そのあたりは、むかむかとはきけがするほどくさくて、そばへもよれぬほどでした。

光男は、はなをつまみ、息をこらして、

「民治、民治！腹がひもじいのか。」

と、ささやきかけました。錠のかかったダンベーの中の、罰をうけたかじこのすがたはみえませんが、くさいのをがまんして耳をおしつけると、民治は、せいぜいとのどをならしながら、

「なにかください。なにかください。」

とうめきつづけていますが、それをどうすることもできません。光男はもういちど石垣をのりこえました。

このうわさをきいた島の人たちはおどろきましたが、

「なんぼぬすみぐいをするというても、ダンベーにいれるのは、ちいとむごいわい。」

「そんじゃけ、みんな漁に出てしもうて、家にだれもおらんなら、しかたないけん。」

「はあて、嫁ごも1日おらんのけえ。」

「がきをつれて畑じゃ。うちらとおなじよ。」

「まあ、ちつとはせっかんせんことにゃ、かじこもようならんが、手のかかるもんじゃ。」

「やっばあ、かねはろうて買うてきた子のほうがええかもしれんのう。」

とはなしはもとにもどってしまいました。

光男と正美と三郎は、分教場にちかい岩のかけにあつまって、夜のふけるまでしんばいしました。

「民治は死んでしもうで。たすけてやることもでけんしろう。」

「あの家では、なにもくいものをやらんのか。」

「ノリなどいれてやっとするらしいが、朝と夜だけじゃもの。このごろはこえもだせんようだ。」

「この島へきてから、おれはいつべんも飛行機のとぶのをみたことがないや。」

と三郎がいました。

「飛行機がきて、ピカドンをおとしたら、この島はいつべんにとけてしまいうだろうなあ。」

佐々木民治は、20日ほど箱にはいついて、くそ、小便にまみれて死にました。民治の死にざまをみかじこはひとりもいません。島の人たちも、それっきり死んだかじこのうわさをしなくなりしました。

7月になりました。旧のお盆の日は、かじこたちも朝からしごとをやすみました。こんな日が1年に1どか2どありまあした。

島の人たちは、夜のふけるまで、灯籠ながしをし、かじこたちは、岩のかけにかたまつて、それとおくからながめていました。3人のかじこと1そうの舟が、忍島をぬけだしたことに気のついた人はひとりもいませんでした。

灯籠ながしの夜は、かぎをかけない小舟が、なんそうも浜へのりすてられてあります。なん年も島でくらし、それをしっている石原光男は、いまではおとなのようにたくましくなった三郎をさそいました。耳のわるい正美もさそいました。

夏の朝はやく、本州のある港町のおまわりさんが、病人のようにふらふらした3人の少年をたすけて、駐在所へつれていきました。きけば、ひとばんじゅうろをおしつづけて、忍島の沖のうず潮をのりきってきたというのです。3人の少年は駐在所の土間へなきくずれ、いつまでもなきやみませんでした。おまわりさんは、ひとりの少年のふところから、ちいさいハーモニカがころがりだしたのをみつけて、それを机の上におくと、

「はやく、朝めしてもつくつてやれや。」

と、おくさんにいいつけました。

瀬戸の忍島が日本じゅうにしれわたったのは、このときからでした。

なぜ児童憲章がつくられたか

ある日、とつぜん、県庁の人、警察の署長、労働基準局の人、新聞記者などが、そろそろと浜へおりたちました。忍島の人たちはびっくりしました。こんな人たちが、そろって島へきたのははじめてでした。おまけに、「民主主義」だとか、「人権」だとか、「労働基準法」だとか「人身売買」だとかと、きいたこともないことばがとびだすので、なおさらめんくらってしまいました。

「かじこがひとり死にました。じゃけん、駐在さんがきたとき、とどけてありますがのう。なに？

わしらがかじこをいじめた？ そんなばかな。はなしが大げさすぎますのう。」

「あたらしい規則ができたちゅうなら、それをおしえてくれにゃこまりますがな。わしらは、100年もまえからこうしてくらしをたてておりますのう。」

「そうですとも。びんぼうはしとりますが、この島は、波風もたてずに、おだやかにやってきま

したんじゃ。」

親方やおかみさんは不服そうに、そっぽをむきました。けれども、そうでない人たちもいました。

「ふるいかんがえは通用せんよ。民主主義じゃ。島のやりかたをあらためねばならんと。」

1951年（昭和26年）になって、また5人のかじこが夜の瀬戸内の海をにげてきました。国会でもようやくこのことで会議をひらくことにまりました。この年の5月5日には児童憲章もうまれました。これは憲法にしたがって、子どものしあわせのためにつくられたやくそくことです。

児童憲章は、

児童は、人として尊ばれる

児童は、社会の1員として重んぜられる

児童は、よい環境の中で育てられる

とまえおきをして12か条をさだめたものです。

憲法も、国民ひとりひとりの生命や、自由や、しあわせをもとめる権利をたいせつにしなければならぬとさだめています。

「婦人や子どもの売り買いをしてはならない。」

と世界の国くにでとりきめた条約もあります。

憲法も、児童憲章も、文字だけではどうにもなりません。それにそわないものの原因をつきとめ、とりのそぎ、やくそくどおりの世のなかをつくりだすために、国民ひとりひとりがちからをあわせなければなりません。それは忍島のかじこのことだけではないのです。



1987年度瀬戸中学校3年B組 校内陸上大会

1987年度文部省指定道徳教育研究推進校・公開授業の記録（瀬戸中学校3年B組）

主 題 「人間としての生き方を求めて」

1987年6月18日（木）

資 料 「瀬戸のかじこ」（栗栖 良夫）

授業者 森 口 健 司

T 1: みんなと4月に会って、60日、2ヶ月余りが過ぎていきました。この2ヶ月余りの一日一日は何であったのだろうか。4月8日に会って、毎日、朝、帰りの学活の時間、授業、休み時間、すべての時間、人間としてどういう生き方をするか、生きることを求めてきました。それが、みんなと生きてきた証であると思います。4月の始めに、真壁仁の「峠」という詩をみんなと勉強しました。みんなと36人の仲間と共に、峠を越えていきたい。精一杯に生きていきたい。中学3年という人生の峠をみんなでがんばって越えていきたい。人間として、すばらしい生き方とはなにか。みんなとのかかわりとは、生きることをみんなで求めていくことだと思えます。6月に入って「瀬戸のかじこ」をみんなと読んできました。今日は、「瀬戸のかじこ」に寄せて、みんなの思いを語ってほしいと思えます。みんなの生き方を「瀬戸のかじこ」の中に吹き込んで語ってください。村田正美という少年がいましたね。

村上(男)僕は、村田正美が「かじこでええ」そういった気持ちが少しわかるように思います。みんな、彼をあかんあかん、そう責めたてて、彼を追い込んでいくうちに、彼は本当にそう思ってしまったのだらうと思います。でも、彼は本当にあかんのだらうか。彼は心からかじこでいいと思っているのだらうか。いや、彼の思いはそうでないと思えます。自分はだめだ。彼はそう思い込んで、家族のことを考えて、そういったんだと思えます。そう彼は思い込んでいるだけであって、決してだめではないと思えます。彼は、それでも、かじこになりました。かじこがどんなものであるかを知っていてかじこになりました。しかし、彼は、差別されていることに気づいていません。また、島の人々も差別されていることに気づいていません。そこに人間らしさが失われていると思えます。真の人間とは、差別があれば抵抗する。それが人間本来の姿だと思えます。そして、団結して、自分たちを追い詰める差別と闘わなければならないと思えます。しかし、彼らはそうではなかった。彼らをそうさせたものがあります。彼らを人間喪失にさせたものがあります。それは、絶対にあってはならないものだと思います。

T 2: 耳が悪いから、お前は普通の仕事ができん。「あかん！あかん！」と言われて大きくなった。かじこというものがどんなにつらいものか、他の少年は知らなくて、だまされて連れてこられた。しかし、村田正美という少年は違う。かじこがどんなにつらい仕事であって、どんなに苦しいものであるか、そのことを知っていながら、かじこになった。「お前は耳が悪いけん、だめなんだ」と決められてきた。そのことがたまらなくつらいですね。他のかじこたちが、夢を語っても、「俺はかじこでいい」と言う。そんなことしか言えない。村田正美という少年に可能性を失わせたものがある。正美という少年に、お前にはすばらしいものがある。その可能性を信じて生きるんだということを教えずに、だめにしていたものがありますね。

枝川(女)漁師たちは、自分のことだけを考えて、人のことは何も考えず、12才から18才までの夢をえがいて生きる年頃の子供たちを、かじことして奴隷のように扱ったことは、本当に許せません。もし、自分がそのような立場になったとき、その漁師たちはどう思うでしょうか。子供たちを平気でだまし、自分の思うように仕事をさせ、本当に腹がたちました。村田正美は、親から耳が悪いから「あかん！あかん！」と言われ、「だめだ」と決めつけられてきました。そのことによって、自分はもう一生かじこでいいと言ったとき、なんともいえない気持ちにな

りました。光男や三郎は夢を持っているのに、正美は夢も何も持っていません。やっぱり人から、悪い悪いときめつけられると、だめな人間になってしまうんだなあと思いました。漁師たちは、自分がしいたげられているということを知らないから、平気で人をしいたげています。本当につらいことだと思いました。

T 3: 人にはすばらしいものがある。それを伸ばしていくことが、生きるということですね。自分には何ができる。自分にはどういうことができるのか。そのことがわかる。そして、そのことを伸ばしていくことが、本当に生きるということですね。

泉井(男)村田正美は自信をなくしていると思いました。今まで、「だめだ！だめだ！」と言われて、「僕はだめなんだ！」と思込んでいると思いました。だから「おれはかじこでいい」と言ったんだと思います。あとの二人は、生きる望みをもって、抵抗しているのに、正美もいろいろ言ってきた人たちに抵抗していければと思いました。人間はすべて同じだから、どんな人でも、人の心を傷つける権利はないと思っています。

T 4: 自分是可以る。自分は、がんばればできるんだということをわかるということが、大切なことですね。以前、ウサギの里親の話をしましたね。夏休みになってウサギの世話をする人がいないので、小学校3年生の子供たちにウサギを7羽のウサギを家で預かって欲しいと言って、7人の子供がウサギを持って帰ったけど、6羽のウサギが死んでしまった。しかし、1羽のウサギは40日の日を見事に生き抜いて、見事に成長して学校に帰ってきた。その1羽のウサギを育てたのが、進君という少年だったですね。しかし、その進君は、決して成績はよくなかった。テストをする度に「だめな子！だめな子！」と言われて続けてきた。ウサギを預かるというときも、「進に先生わたすんえ、あんなにわたしたってあかんでえ」と陰口をたたかれた。でも、進君は、ウサギが好きだったから、動物が好きだったから、うれしそうに持って帰った。そして一人だけ見事に育てあげた。進君はウサギを育てることができたことによって、自分というものに自信を持つようになった。教室での表情も生き生きしてきた。成績もそれから伸びていった。6年生のときには児童会の役員にもなった。この前この話をしましたね。人間の能力というのは、自分が信じられる、自分ができるという、自分には可能性があるということがわかることが大事なんです。だれでも決めつけられたら、「あかん！あかん！」と言われたら、本当にあかんようになっていくんです。大事なことは自分が信じられる。自分は、やればできるといことがわかるということです。自分の可能性を信じて生きる。それが本当に生きるということですね。

金沢(男)実は、僕が、石原光男、村田正美、伊藤三郎、佐々木民治の4人の中で、一番つらさがよくわかるのは、村田正美という少年です。なぜかという、僕とこの少年は一つ似ている点があるからです。それは、耳が悪いということです。どうやら、村田正美は両方らしいけど、僕は右の方が悪いのです。僕は全く聞こえないというわけではないけど、ちょっと聞きとりにくいのです。そこで、僕は精密検査をした方がいいと思って、耳の病院へいったところ、その病院の先生に「耳が悪い。こんな耳じゃ、パイロットや駅員には、なれんなあ」というようなきついことを言われたことがあります。つまり、村田正美と僕は、同じような感じで一人の普通の人間としては、見られなかった。僕は正直いってそのことがかなりショックでした。本当につらかったです。一人の人間として認めてくれないということが、たまらなくつらかったです。でも、母の協力もあり、僕は立ち直りました。「それがなんな！」と思って、「歯を食いしばって生きていったる」と決意をしました。僕は、今でもそう思い続けています。村田正美

は、自分が認めてもらえないと、自分をあきらめて、開き直っていたけど、後に二人の仲間に支えられて、勇気を奮い起こし、強く生きる決心をして島を逃げました。僕も、多くの仲間と共に強く生きたいと思っています。

T 5：金沢君の家に家庭訪問したとき、お母さんが私に話してくれました。つらいことがあったんです。親子いっしょに泣いたんです。くやしくてくやしくて涙が出ていっしょに泣いた。がんばろうなって言うて、負けずにがんばろうなって言うた。私の気持ちをくんでくれて、私の思いをくんでくれて、見事に立ち直って、今、がんばっている。金沢君が、今、言うてくれたこと本当によく言うてくれたと思うんです。がんばって生きるんじやと決意したとき、人間はできる。やればできるという気力を持って、やりさえすれば、必ず伸びるんです。お前らあかんとだれが決めつけることができるんですか。人間というものは、元来、その可能性を讃えられるべきものなんです。大事なのは、自分が信じられるということ、やればできるんだと自分自身を自分自身の可能性を信じて、生きることができるということです。それが、人として本当に大事なことですね。

長尾(女)「瀬戸のかじこ」には、本当にいろんなことが書かれていると思います。差別されていることに気づかず、他の人を平気で差別する差別の悲しみや、子供たちの団結、自分の可能性が見えなくなって展望を失った姿、いろいろなこと書かれていたと思います。忍島は、政治から切り放されて、新しい民主的な憲法ができたことも知らないくらい差別されていました。そのことを知らずに、弱い立場のかじこを差別している。かじこを人間としてみていない。かじこのひとりぐらいというような考え方で佐々木民治を人間でないような死なせ方をする。そしてそのことをすぐに忘れてしまう。差別していることに気づかない。人権感覚に目覚めていないとどんなことになるか。人の心も、体も平気で傷つけてしまうようになります。差別をすること、差別をされることの悲しみをみんなが気付かなければ、大変なことになると思い知らされました。石原光男、村田正美、伊藤三郎の3人は、自分たちがしいたげられているという事実気がつかなかったら、行動にうつすことはできなかったと思います。あの抵抗がなかったら、佐々木民治のような子供が、まだ出ていたと思います。それと、石原光男と伊藤三郎に、それぞれ展望があったから、人間として生きたいという願いがあったから、流れの速い瀬戸内海を渡ることができたんだと思います。そして、それは、3人だったからこそ、できたんだと思います。3人の中の村田正美は、親からも「耳が悪いから普通のことができない」というようなことを言われて、自分も、「かじこしかできない」と思い込んでしまっていました。人は、なにか可能性を持っています。けれど、それを見えなくしてしまうものがあると、その人は希望を失ってしまうと思います。人は、一部分で価値を決めるものではないと思います。人は、認めるものであり、大切にされるものだと思います。

原田(女)「瀬戸のかじこ」を学んで、一番心に残ったこと、それは石原光男、村田正美、伊藤三郎の3人のことでした。かじこの親方は、かじこ同志が親しくするのも嫌う。人と人との関係を引き裂く。そんなことは許されないことだと思います。それでも3人は、家の人に見つからないようにこっそり家を抜け出して会っていました。会っているのが見つければどうなるのか、わかっているのに……。自分が痛いめに会うことがわかっているのに……。これが、だれにもまねのできない本当の連帯だと思います。人数は少ないけれど、その3人が集まって、お互いの夢を話し合う。いろいろな苦勞も話し合う。それは3人にとって一番の生きる中での安らぎであって、楽しみであるに違いないと思いました。石原光男と伊藤三郎は、だまされて連

れてくれました。村田正美はかじこがどんなものか、知っていて、なりたくはなかったけど、「お前は耳が悪いから、ほかの仕事はできない」と決めつけられ、「自分がかじこぐらいしかできない」と思い込まされてかじこになりました。「自分がかじこでいい」と言ったけど、本当は正美自身もいやでしかたがなかったと思います。でも、小さいときから「だめで何もできない」と言われ続けたため、正美自身も自分はだめなんだと思い込んでいるのだろうと思います。先生のよく言うレッテルをはられてきた姿だと思いました。人間には必ずすばらしいところがある。生きるとは、そのすばらしいものを育てていくことだと学んできました。人を決めつけて、レッテルをはっていくのではなく、人のすばらしいところを見つめ、その人を大切にできる人でありたいと思います。人は、大切にされるものであり、大切にされるものであると思います。

T 6: 「峠を越えて」36人の仲間が、この3日の仲間が、お互いを大事にする。お互いを認めていく。みんなに話してきた。「一面でものを見るな」と、「一側面しか見えない人間になるな」と、上からも見える。下からも見える。横からも見える。後ろからも見える。裏からも見える。そんないろいろなもの見方のできる。人を本当に大事にできる。人を認めていける。そんな生き方をしようでないかと、話をしてきました。みんなは、そのことを見事にとらえて、わかってくれた。仲間を大事にする、仲間を認めるから、仲間から大事にされる。仲間から認められるんだと、そのことをわかってがんばっている。そのことをもっともっと学びながら、がんばっていきたいと思います。長尾さんは、今、佐々木民治という少年についても、話してくれたですね。この教材の中で、先生が一番震えたのは、佐々木民治の死にぎまでした。なんとも言えない思いになりました。「なんな！これは……」と思いました。

枝川(男)佐々木民治がダンペーに閉じ込められて、20日もの間どんな思いをしたのだろうか。民治の立場になるだけで、つらい苦しい思いになります。だから、民治はもっともつつらい、それ以上の地獄だと思います。そして、ダンペーに閉じ込められたまま死んでしまった。民治は、地獄をさまよったまま死んでしまったと思いました。

T 7: 地獄をさまよった。簡単に地獄と言うけれど、ダンペーという箱の中に入れる、箱の中で日干しにするんです。どんな状態になりますか。体が弱って、腹を下して、どうにもならんから、箱に閉じ込めてしまう。始めのうちは言よった。箱の中から「出してください」「助けてください」「出してください」と……。しかし、しまい「出してください」と言う声も出んようになった。なんて言うたか。「なにかくください」「なにかくください」と笛の音のような声を出した。そして、声にもならない「なにかくください」「なにかくください」という叫びを残して死んでいった。この少年の姿を想像したとき、なんとも言えない気持ちになりました。これが、人間の死に方かと、怒りがこみ上げました。

坂辺(女)ダンペーの中で、大小便にまみれて死んでいった佐々木民治を思い出して、なんとも言えない怒りが込みあげてきます。ろくに食べさしてもくれない。声もでない。おなかが減って死にそうなのに、なにかくくださいと叫んでいるのに、人にはつぶやきにしか聞こえない。海苔ぐらいでおなかがいっぱいになるだろうか。人間はみな平等なのに、島の人がかじこを人間として扱っていない。気に入らないと御飯を取り上げて、たたく、そして何一つ文句を言わさない。自分は、かじこより上だと思って、かじこを踏みつけて、踏みつけにして、その上でゆうゆうと暮らしている。自分たちが、他の人たちからしいたげられているということに気づかずに、かじこをこき使う。私にも、かつてありました。一人の子をいじめていじめて、いじめ抜

いた。そのとき、自分は嫌われているとも知らずにいじめていた。後で気がつくとも本当に悲しいことだと思います。自分以下を求めているときの心が一番悲しいです。かじこという言葉の裏にある、口から血をふくような事実を知って、私は、本当の人の痛みがわかるような人になりたいと思います。

T 8: 自分のおかれている状況が見えなかったら、自分のいる状況が見えなかったら、平気で人をしいたげていく。忍島の人たち、日本の国から疎外されている。自分がしいたげられていることに気付かないから、平気で人をしいたげていく。平気で人を殺していく。そのことをなんとも思わない。状況が見えない。自分が見えないということがどんなに恐ろしいことか。生命というものがどんなものであるか。そのことが、ちっともわからないで、自分のおかれている状況が一つも見えんで、平気で人をしいたげていった。そのことがどんなに恐ろしいことか。少年を狭い箱の中に閉じ込め、人の声とも思えないうめき声がするまで日干しにして、殺してしまう。平気で殺してしまう。自分のおかれている状況が見えないということは、大変なことなんです。しかし、そのことに気づかない。

吉成(女)人間を人間と思わず奴隷のように扱い、御飯も食べさせないなんて人間のすることではないと思いました。満州事変のときの体験を書いた本の中に姉妹がいて、妹がひどく腹を下してしまって、朝、日干しになったように死んでいたということが書いてありました。だけど、その当時幼かった姉だから何もしてあげられなかったのは当然なのに、妹を死なしたことを悔やんでしかたがないと書いてありました。でも、民治を殺してしまった親方たちは何も思わなかった。そのことに腹がたちました。私は、「瀬戸のかじこ」という題を聞いたとき、かじこというのは舟に乗ってかじをとるだけのものだと思っていました。しかし、実際、読んでびっくりしました。あまりにもひどいことです。よく「おしん」とか「ああ野麦峠」とかをテレビで見たとき、つらいだろうなあと思ったことがありますが、ダンペーに閉じこめるなんて、まるで「けもの」を閉じこめたみたいで。死ぬまで暗くせまい箱でという死にざまは、本当にむごいです。

T 9: 生命というものはなんであるか。生きるということはなんであるか。そんなことを一つも考えない。今、自分がどういう中で生きているか。そのことに一つも気がつかない。それがどんなに恐ろしいことであるか。自分がおかれている状況が見えない。自分がどのように生きていくのか。そのことが一つもわからない。自分というものを生命というものを一つも考えない。そんな生き方が、どんなに恐ろしいか。忍島の人たちを考えていくとき、そのことがとてもつらくてたまらないですね。平然とこんな仕打ちをしていく。この事実を知って、そのことがつらくてたまらないですね。忍島について、忍島のこの事実について考えていきたいと思います。

森(男)人は、人を認めるから人から認められるようになる。この言葉を初めて聞いたとき特別に感じたものはありませんでした。しかし、「瀬戸のかじこ」を学んで、大変すばらしいことだということがわかりました。忍島の人々は、かじこを人として認めていませんでした。それは、忍島の人々が、周りから差別されていることを知らなかったから、しいたげられていることに気づかなかつたからだと思います。しいたげられている人たちの気持ちを知ろうとしなかつたから、人をしいたげていったんだと思います。もし、人の悲しみを感じられることができたのなら、人を人とも思わない無残なめに合わすことはできなかつただろうと思います。このことを通して、人を認めていく心の大切さ、人はお互いが認め合っていくものであるということを感じることができたと思います。

T10：自分が、自分たちが、自分の国の中で、どんな位置におかれ、自分が、自分たちが、どんなに疎外されているか。そんなことを一つも知らない。そのことに全く気づかない。平然としていたげていく。特定の人間を平気でしいたげていく。自分が見えないということがどんなに恐ろしいことであるか。そのことが痛い程わかりますね。

丸泉(男)腹一杯食べさせてやると言っ、だまして連れていき、こき使うだけ使って何一つ食べさせない。こんな話は、昔だけでなく今もあるように思います。たとえば、この会員にはいれば、安く外国旅行ができると言っ、後で多額の金を払わせたり、また、会員になれば今もっているお金が2倍にも3倍にも増えると言っ、たくさんのお金をだましとる詐欺事件のニュースを耳にしました。これらの事件では、弱い立場にある一人ぐらしの老人が、よくだまされています。僕は、弱い立場の人たちをだましてもうけようとするのは、絶対に許されないことだと思ひます。

T11：いつも、泣かされるのは、一番下で生きる。一番つらい状況に生きる。一番弱い立場に生きる人が、泣かされていく。なんでこうなるんだろうと思ひ。いつもみんなに話してきた。大事なことは、人を大切に認めていくことなんだと……。苦しい中で生きている。つらい中で精一杯がんばっている。そんな人たちの悲しみが見える。苦しみが見える。心の痛みがわかる。それが本当に人間の生き方であると思ひ。つらい苦しい状況に生きる。みすぼらしい姿で生きている人を見て、どのようにかわり、どのように生きようとしていくのか。悲しみを共にし、痛みをわかち合い、苦しみを許さない、悲しみを許さないという怒りを持ち続ける生き方を求め続けたいと思ひます。共感できる、悲しみの見える人でありたいと思ひます。

豊崎(男)僕は「瀬戸のかじこ」を学んでいろいろなことを思ひました。忍島は日本でありながら日本ではなかったと思ひます。政府から、政治の流れから切り離されていました。しかし、自分たちがそうされていることにも気付かず、かじこたちをしいたげてきました。かじこを人間だとは思ひませんでした。また、つらいかじこの生活をがんばりぬいて一本釣りの漁師になった人たちも、かじこが集まるのをいやがりました。それは、かじこが連帯するのがこわかったのだからと思ひます。どうして、かじこの苦しさを知りながら、優しくできないのだからと思ひます。3人のかじこが、忍島を逃げ出したけど、何人かの人忍島へ来ただけで、国はまだ何もしなかった。しかし、5人のかじこが逃げて来て、やっと国会でも問題になった。少数の人たちが、言っただけではなかなかできない。しかし、大勢の人たちが、団結すると問題は必ず解決していくと思ひました。

菊川(女)「瀬戸のかじこ」を読んだとき、前の私だったら、他人事で、かわいそうとしか思わなかったと思ひます。「瀬戸のかじこ」を読んでいると、戦後のいろいろな情景が、頭に浮かんできます。その情景は、貧しい、苦しいものばかりです。その苦しい、貧しい状況を利用して、子供たちをだまして、かじことして島へ送り込んだ人たちは、人間とはいえないと思ひました。そして、島の人たちも、自分たちがしいたげられていることに気づかずに、平気でかじこにされた子供たちを苦しめたことも、絶対に許せないと思ひました。私は今までよりも、もっと人の大切さを知ったように思ひます。でも、もっとわかっていきたい。もっといろいろなことを知りたい。そう強く思っ、たのも、「瀬戸のかじこ」を学んでからのように思ひます。

賀川(男)「瀬戸のかじこ」を学んで、人間以下の生活をさせられてきたかじこたちの心の痛みが、しみじみと感じられました。かじこたちは、腹一杯食べることもできずに、つらい仕事をやらされてきました。しかし、こんな中でも、かじこは、かじこ同志で、親方たちが寝静まった後、

こっそり真夜中に抜け出して、将来のことを、お互いの夢を話し合っていたのは、とてもすばらしいことだと思いました。このとき、かじこの唯一生きる支えとなったのは、やはり将来の夢を語りあい、みんなと心が通じあえていたことだと思います。僕は、この「瀬戸のかじこ」を読んで、心を通じ合うこと、仲間同志励まし合うことが、とても大切なことだと思いました。

T12：人は一人では生きられないですね。仲間がいるから、自分を認めてくれる仲間がいるから生きられる。部活動の話をする。バレーやバスケットの練習にしても、一人であれだけの練習ができるか。2時間、3時間、あれだけの活動ができるか。一人でできるか。先生は、ずっと柔道をしてきたけど、柔道は一人ではできませんよ。一人ではがんばれんですよ。仲間がいて、人がいて、横で声をかけてくれる。「ファイト！」と声をかけてくれる。そうやって励ましてくれる仲間がいるからがんばれるんです。人は一人では生きられん。そんな苦しい中でいるからこそ、話し合いたい。そんな当り前の願いも奪われた。会うことすら許されなかった。それでも、お互いの思いを確かめ合って、思いを語り合って、忍島を出ていった、逃げ出していった。人は、本当に人に支えられて生きている。そのことを本当に強く思うんです。

岡(男)僕が「瀬戸のかじこ」を読んでわかったことは、自分たちがしいたげられている。それが差別とわからないと平気で人を差別するようになるということです。僕は、このかじこが普通の子じゃないけんとか、盗人を家にこうとするようなもんじゃなどと言われたことに、とても腹がたちました。また、土間で寝るだけの少年労働者というところは、人間と認めていないと思いました。そして、佐々木民治がダンペーに閉じ込められたうえ、庭先の小便壺の上におかれて、食べるものは海苔だけだった。僕はここを読んだとき、こんなこと絶対に人間のすることでないと思いました。そして、なんでこうなるんだという怒りが込みあげてきました。もし、先生と生きることを勉強していなかったら、「瀬戸のかじこ」を読んでも、こんな怒りは起こらなかったらと思うます。もっと生きる勉強をしたいと思うます。

T13：4月から毎日、生活ノートを書いてもらっています。毎日、朝、帰りの学活で夢を語り合って、理想を語り合って、生きることを求めてきた。そんな毎日の営みがあって、みんなの思いを生活ノートから聞かせてもらって、僕は、みんなと、さまざまなことを生きることを勉強していきたいという気持ちが、ものすごく強くなった。みんなと、この「瀬戸のかじこ」が読みたいと、「瀬戸のかじこ」をみんなといっしょに学びたいと思うようになった。それは、みんなと毎日生きることを求めていく。生きることを考える。そんな一日一日の積み重ねがあったから、みんなと学びたいと思うんです。生きることを学びながら、人間としてどのように生きていくかということのをこれからも、みんなと共に求めていきたい。求めていきたいと思うんです。

潮崎(男)「瀬戸のかじこ」が、僕に訴えているものは、外から見ただけで、その人を決めつけるのではなく、だれもが持っているすばらしい心を見つけだして認めあっていかなければならないということだと思いました。この前の弁論大会で、中山君が、島田のものはあかんと言われると言っていたが、瀬戸中の子が高校へいくと、瀬戸から来たと、からわれるというようなことを聞いたことがあります。僕たちも、差別されていることに気付かないと、差別を平気でできるようになる。差別されていることに気づかないで、平気でかじこを差別した忍島の人たちと同じようになってしまったと思います。

T14：生きることが見えなかったら、生きることがわからなかったら、平気で人をしいたげていくようになる。人は大事にするものだということがわからなかったら、平気で人を邪険に扱っ

ていくようになるんです。中山君が弁論大会で言ってくれた。瀬戸中に通う。島田島から瀬戸中に通う生徒の数というのは、少数です。全体から見たら、瀬戸小学校や明神小学校から来る生徒の数と比べたら、島田小学校から来る生徒は、少ないです。少ないから、少ないから、邪険に扱っていく。からかっていく。なんでそうなるのか。大勢の中でいたら、楽ですよ。大勢の集団の中に入っていたら、楽ですよ。一人になって生きる。一人になっても正しいことをやり抜いて生きる。少数の中で生きるということは、本当につらいことです。厳しいことです。島田島から来る生徒を「島田もの！」と言う。少数であるがゆえに「島田もの！」とばかにされる。平気でそんなことを言う。そんな陰口をたたく子が、今度、鳴門市内の高校に行ったら「お前、瀬戸から来たんか」と特別な目で見られる。一中や二中と比べたら、瀬戸中は小さいですね。一中は1000人を越えた生徒がいる。瀬戸中は300人もいないですよ。3年生は72人しかおらんですよ。少数ですよ。少ないからそのように扱われていく。そのことが見えなんだからいかなのです。そのことがわからなんだからいかなのです。人は大事にする。人は認め合う。少数の中にある真実というものがわからなんだから、平気で人をしいたげていくようになる。人は大事にするものだ。少ないから大事にするものだ。そのことがわからなんだからいかな。今、社会科で民主主義を学んでいる。民主主義というのは、少数意見の尊重でしょう。少ない人を大事にする。弱い立場の人を大事にする。それが民主主義でしょう。いつも言うけど、大勢の中で主体性をなくして生きる生き方より、少数の中でも一人になってもそれを真実を精一杯に貫いて生きられる。そんな強い人でありたいと思うんです。100人でいっしょに歩こうと歩き出したら、あとの99人が走り出しても、その最初の約束を守って、一人になっても歩き続けることができる。そんな人になりたいと思うんです。それが本当の人間として生きるということでないかと思うんです。生きるということがわからなかったら、生きるということがなんであるかということが見えなかったら、平気で人をしいたげていく。情けない生き方をしていくようになる。もっともっと、みんなと、生きるということを生きるこの意味を求めていきたい。生活ノートの営みを本当に大事にしていきたいと思うんです。

横井(男)「瀬戸のかじこ」を読んで、今まで感じなかったなにかを感じたような気がします。それは、怒りのようなものだと思います。「瀬戸のかじこ」に出てくるのは、みんな僕と同じ年頃の少年ばかりです。なのになぜ、あそこまでつらいめに会わなければならないのかと思います。ここに出てくるかじこは、人間として認められていないので、人間のような扱いはされていません。かじこの佐々木民治は、人間が住めるとは思えないダンペーという箱に入れられました。これが人間のすることかと思いました。こういうことがほんの40年前までありました。僕らにとって身近なことのようによります。この4月から学んできた中に、人を認めるから自分を認めてくれる、人を大事にするから自分を大事にしてくれるというのがあります。先生は、僕らをとて大事にしてくれると思います。だから、僕らも先生の期待にこたえなければいけないなあと思います。これからは、今まで自分の心の中にあつたみにくいものをきれいにしていきたいです。

村上(男)「瀬戸のかじこ」の中には、人の生き方があると思います。自分が差別されていることに気づかないために、差別の苦しみ、悲しみが見えない差別者の生き方。また、差別に負けない、俺たちは人間らしく生きるんだという強い展望をもった生き方。強い願いによって、3人は島を抜け出すという行動をとりました。それは、自分たちは差別されているということを知っていたからこそとれた行動であったと思います。しかし、それによってかじこは助かったか

というふうではありませんでした。その後もしばらく続いて、また、かじこが逃げて来たとき、はじめて国会で問題になりました。3人の行動は、人間らしく生きたいという展望のこもった行動であったと思います。その行動は、他の人にも勇気を与え、つぎのかじこが逃げ出すことへもつながったと思います。人間には、よりよい生き方を求める抵抗の精神が必要であると思います。また、私達は、人の立場を理解することが大切だと思います。人は、他人であり、また自分でもあると思います。理解するということは、認めていくということだと思います。差別者の生き方とは、人を認められない生き方だと思います。

T15：よりよく生きたいと願う。人間には抵抗の精神がいる。何人かの人々が「兎の眼」、灰谷健次郎の「兎の眼」読んでいます。また、読んでくれている。あの中に出て来る小谷先生が、高校のとき、東大ボケとあだ名される社会科の先生が授業中なにげなく言った。「人間にはレジスタンスが大切です。抵抗の精神が大切です。人間が美しくあるための抵抗の精神をみんなは忘れてはなりませんよ」と……。よりよく生きたいと願う生き方は、本当にすばらしい生き方だと思います。そんな生き方こそ多くの人にすばらしい感動を与える生き方だと思います。それが本当に生きるということでないかと思います。

井川(男)忍島から勇気を振り絞って、逃げ出した3人のかじこの生き方を学んだとき、僕は、社会の時間に学んだ朝日茂さんのことを思い出しました。朝日さんは、重症の結核患者で十数年間も国立の岡山療養所に入院していました。身寄りがなく毎月支給される600円のお金で生活していました。そこへ30数年間連絡のなかったおにいさんが、毎月1500円づつ仕送りをしてくれるようになりました。しかし、朝日さんのところへ入ってきたのは、1500円ではなく600円でした。あとの900円は毎月の医療費の一部として事務所が取ったのでした。また、今まで支給されていた600円も支給されなくなり、結局朝日さんには、600円しか渡されませんでした。朝日さんは、あと400円、せめて1000円は渡して欲しいと県知事や厚生大臣に訴えたけどそれは却下されました。そして、裁判に訴えました。しかし、朝日さんは裁判の途中「こみ上げる無念は言わず解放の、道一筋を歩まんとぞ思う」という辞世の句を残してなくなりました。でも、朝日さんの裁判が問題になりだすと、国は600円という支給額を急に1035円にあげています。朝日さんは、僕たちに「訴えることにより、道は開ける」ということを教えているように思います。

T16：無念の涙を流しながら、朝日茂さんという人は、一生を51年の一生を終わっています。600円では生活しにくい。何かうまいものでも月に1回食べたい。せめて1000円くださいと、1500円送ってくれるうちの1000円くださいと、しかし、それはとうとうかないませんでした。とうとうかなわなんだんです。途中で死んでしまうたです。しかし、それが問題になって、その朝日さんが裁判に訴えたことにより、その600円という額が、ずっと640円、670円にしか上がらなかった額が、問題になったことにより、急に1035円に上がったんです。朝日さんの抵抗というのは、しくみを制度を変えたんです。「訴えることにより道は開ける」何か深いものを朝日茂さんの生き方から、私たちは学んだように思います。

金沢(男)「瀬戸のかじこ」の中に、伊藤三郎という少年が出てきます。この少年は、ハーモニカを大切に持っていました。感化院の小使さんがくれたものでした。でも、この小使さんにとって、そのハーモニカは、死んだ子供の形見でした。そんな大事なものをなぜ感化院なんかにした子供にあげたのだろうかと思いました。僕はこの話を学んでいく中で、それは人間の本当の優しさであることがわかりました。僕には、なかなかできない行動だと思います。でも、僕は

この優しさというものを早く身につけたいです。この優しさがあったからこそハーモニカが、三郎の生きる支えとなり、このハーモニカがあったからこそ、島を抜け出すまでがんばれたのだと思います。もし、ハーモニカがなかったら三郎は、島を逃げ出すことさえも、また、その勇気さえもなかったらと思うと思います。その頃はもちろん、今の時代でさえ、そんな優しさを持った人は少ないのに、この小使さんは本当にすばらしいと思いました。僕は、その優しさを学んでいきたいと思っています。

T17: 優しいということは強いということです。強いということは優しいということです。私たちは、本当に人の優しさに支えられて生きているような気がします。

枝川(女)感化院の小使さんが、別れるとき伊藤三郎に「島へいったらふいて遊べ。そして、よう働いて、立派な漁師になれよ」とポケットに押し込んでくれたハーモニカは、三郎の生きる支えであり、心の支えであることを学んだとき、私は、中西のおばさんのことをふと思いました。この前、創立40周年に記念のリボンを作っていたとき、中西のおばさんが、毎年卒業生のために一人一人のリボン作ってくれていることを知りました。「みんなにしてあげるとは、こんなことしかないんよ」とたくさんのおばさんの心を込めて作ってくれていることを知りました。私たちは小学校のときから、自分たちでリボンを作っていました。だから、ほかの中学校が、リボンを買っていたなんて知りませんでした。私は、中西のおばさんの手作りのリボンの話を聞いたとき、おばさんの優しさが、私の心の中にとっても温かいものとして伝わってきました。私たちは、おばさんの優しさに包まれてとても幸せだと思いました。リボンだけではありません。おばさんは、私たちが勉強している間、廊下をきれいにはいてくれます。また、放課後、1階から3階までの廊下や教室のしまっていない窓を全部締めてくれます。私は、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私も、三郎のようにおばさんの優しさに支えられながら生きていると思います。

正木(女)用務員のおばさんが、リボンをお心を込めて作ってくれていることを私も、知りませんでした。私は作らなければならないから作っているだけとだけ思っていました。この前、先生にリボンのことを聞いたときは、すごく驚きました。「この瀬戸中を卒業していくみんなに私がしてあげられることはリボンを作るだけ」といって一生懸命にリボンを作っている姿は、とても美しいと思います。なんだかいつも私たちは、用務員のおばさんに見守られているように思います。私も、おばさんのような心の美しい人にあこがれます。

T18: 私たちは、いろいろな人の優しさに支えられて生きているように思います。いろいろな人に支えられて生きているように思います。「瀬戸のかじこ」を勉強してきた。これからも生きるということがなんであるか。優しさというのはなんであるか。人を本当に思いやるということがなんであるか。もっともっとみんなと、生きる勉強を生きることを求めていきたいと思っています。今日はこれで終わります。